商・髙橋義仁ゼミ有志 カンボジア研修

国際ビジネス学び交流深める

寄稿　諏訪部 里佳（商3）

経営戦略をテーマとする商学部髙橋義仁ゼミの有志9人（リーダー＝深浦咲花・3年次）は、9月2～7日、カンボジアの首都プノンペンで研修を行った。ミネベアの工場見学で従業員2万人規模の人材マネジメント、イオンでの日本の流通業のアジア展開、カンボジア・プノンペン経済特区での途上・新興国政府の経済政策、国際協力機構（JICA）での日本政府の国際貢献事業、精米機器メーカー・タイワ精機ではベンチャー・ビジネスのローカライゼーションなどを学んだ。

一方、日系企業への就職を目指す学生が多く学ぶカンボジア日本人材開発センター（CJCC）では、私たちが講師として国際交流プログラムを提供した。CJCCは、本学国際交流協定校王立プノンペン大学の一機関で、人材育成およびカンボジアと日本の相互理解を深めることを主な目的に日本政府とJICAが支援して開設している。ビジネス、日本語、相互交流の3コースがある

CJCCでの書道体験には多くのカンボジア学生が参加した

が、全コースの学生に対し日本文化のレクチャーを通じて交流を深めた。

講義では、日本の教育制度や年中行事を説明。文化体験として、書道とそうめんづくりを行った。書道は当初、「希望者数人に体験してもらえるかな?」と考えていたが全員が希望したため、私たちはうれしい悲鳴を上げた。そうめんづくりは、日本の食文化の歴史と出汁のよさを伝えることが目的だった。食べながら学生同士でさまざまな話をし、連絡先を交換した。

カンボジア訪問で、私たちが最も準備に時間をかけ、積極的に活動したのが「CJCCでの国際交流プログラム」だった。最初は私たちの日本語をどれだけ理解し、興味をもってくれるか不安だったが、CJCCの学生は積極的に参加し、短時間ではあったが、有意義な時間となった。努力が報われてうれしかった。

このような活動を定期的に行っていけたら、それぞれの価値観や考え方の視野が広がっていくと身をもって感じた。研修の成果に誇りを持ち、積極的に国際交流に携われたことを糧にしていくと同時に、これからも国際ビジネスにアンテナを張り、深く関わっていけるようにしたい。

・他の参加者（敬称略）石井美沙祈（4年次）、吉田翔哉・梅澤宏太・小川裕平・相田真弥（3年次）、川口泰礼・菊池セサル威仁（2年次）

国際青年育成交流事業でミャンマー派遣

高まった次代を担う意識

寄稿　宮澤 俊太朗（法3）

ミャンマーの青年と多文化共生について意見を交わす宮澤さん（右奥）

私は、2017年度国際青年育成交流事業に参加し、ミャンマー連邦共和国に派遣された。この事業は、国際社会・地域社会で活躍する次世代のグローバルリーダーの育成を目的にした、内閣府主催の青年人材育成プログラムである。

日本から36人が選ばれ、3カ国に派遣された。1団12人の青年のグループの中で、自分に何ができるかを常に考えながら行動することが求められた。

ミャンマーには9月9日から17日間派遣され、ヤンゴン管区首相官邸や日本大使館、商工会議所連盟などを表敬訪問。ミャンマーの青年と開催した「ユースリーダーズフォーラム」では、両国に共通する問題である、異なる文化を持つ人々が共存して暮らしていく社会の形成を目指す「多文化共生」や「環境」についてディスカッションした。これらの活動を通じて日本のことを伝えると同時に、ミャンマーについて理解を深めることができた。

この派遣で最も印象に残っていることは「温かさ」である。どんなにささいなことにも「ありがとう」と言う思いやりにあふれた派遣団員の心の温かさや、日本人以上におもてなしの心が感じられるミャンマー人の心の温かさに触れながら生活したことによって、今までに味わったことのない満足感と充実感と共に帰国した。

なぜこのプログラムに参加したかというと、共通の目的を持った仲間と出会い、留学とは異なる、集団で一つのことを達成できる経験を求めていたからである。この経験を生かし、間近に迫る就職活動やその先のキャリア形成において、このプログラムの目的でもある「次代を担うにふさわしい青年」に近づいていくために、日々の活動に全力で取り組んでいきたいと思う。

貴重な経験となったこの派遣に協力してくださった法学部の教職員に感謝し、専修大学から再びこの事業に参加するような学生が出てくるように、学内での活動報告など事後活動も積極的に実践していきたい。

情報教育の原点 OKITAC-5090

生田に展示　製造元の副社長ら見学

本学の情報教育の礎となった国産中型コンピュータ「OKITAC-5090」が、生田キャンパス9号館4階に展示されている。10月、製造元の沖電気工業（以下OKI）が見学し、歴史を振り返った。

同機は56年前の1961年11月に本学に導入され、翌年開設した経営学部の授業で使われた。71年に役目を終えた後は長年倉庫に眠っていたが、2001年、現在の情報科学センター受付前に展示された。

同機はOKIの中型コンピュータで、当時最先端の研究開発を行う大学やメーカーに導入された。しかし同社にも本体は残っておらず、本学に展示されていることを知った同社の竹内敏尚取締役副社長執行役員らが10月27日、生田キャンパスを訪れ、見学した。

本学職員が当時のパンフレットや、授業で使っていた手書きのプログラミングの教材を紹介。竹内副社長は「社内でもほとんど知られていない機械なのでもう一度歴史を整理し、後世に残したい」と話した。歓待した佐々木重人学長は「本学の情報教育推進の原点として今後も活用していきたい」と語った。

★

OKITAC-5090は66年に神田から生田キャンパスに移設された。同時期に発足した公認サークル・電子計算機研究会（EDPS）でも同機を使用していた。

OKITAC-5090を見学する竹内副社長（右）

60年代の電子計算室の様子

第1期生の海馬沢孝一さん（昭44経営）は、「課題をこなしたり、鳳祭直前には研究会の発表のために徹夜で使用したり。いい思い出です」と懐かしんだ。松永賢次情報科学センター長（ネットワーク情報学部教授）は「最先端のマシンを学生が自由に使えた。当時から恵まれた環境だった」と話す。

EDPS50周年祝う

EDPS50周年の集いが11月4日、生田キャンパスで約50人が参加して開催され、会のこれまでの歩みを振り返った。

現代表の千代田一輝さん（ネット情報3）が現在の活動を報告した。OBからは「年配者でも取り組めるゲーム作成言語を紹介してほしい」など要望する声が上がっていた。

約20年にわたって顧問を務める松永教授は「歴史と伝統を受け継ぎつつ、新たな試みにも積極的に取り組んでいる姿を見てうれしく思う」と話した。

考案したイベントの内容を発表する渡辺ゼミ生

生田緑地の宝探そう

商・渡辺ゼミ　地域振興発表会で提案

大学生が地域振興のアイデアを出し合う発表会が10月4日、川崎市で開かれた。

川崎市水辺活用プロジェクトの主催で、多摩川にゆかりのある東京、神奈川などの7大学チームが出場。専修大学からはまちづくりをテーマにする渡辺達朗ゼミ（商学部）の3年次生チームが参加し「家族連れや外国人を生田緑地がある多摩区に呼ぼう」と提案した。

参加した渡辺ゼミ生は伊藤夏帆ゼミ長、大森雅人さん、藤田佳奈さん、丸山諒平さんの4人。4人は、豊かな自然があふれる多摩川や生田緑地を生かそうとアイデアをひねった。特に生田緑地は自然の宝庫であるうえ、藤子・F・不二雄ミュージアム、岡本太郎美術館やプラネタリウムなど個性的な施設があることから、宝ものを探し求める「トレジャーハンティング」のイベントを企画。多摩川沿いの二ケ領せせらぎ館を出発し生田緑地を巡るコースとともに、巡回バスの運行や季節ごとの写真コンテストの実施も提案した。

発表後の講評では「地域資源の発掘こそ活性化につながるという着眼点が良かった。地域の人をどう巻き込んでいくかを今後考えて」との注文もあった。伊藤ゼミ長は「発表はとてもいい経験になった」と言い、大森さんは「地元のことをもっと知らなければ」と話している。ゼミ生たちは生田かいわいの素晴らしさを発掘したようだ。